
仮面ライダーオーズ/OOO feat . DOG DAYS 姫と勇者と赤き不死鳥

FOX

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーオーズ/OOO feat. DOG DAYS 姫と勇者と赤き不死鳥

【Nコード】

N2950Y

【作者名】

FOX

【あらすじ】

仮面ライダーオーズ、火野映司が相棒のアンクと共に、真木博士による“世界の終末”を阻止してから半年あまり。映司はいなくなったアンクと再開できる事を信じ、旅を続けていた。

時は流れ3月の中旬、映司はかつての仲間とお花見をするため一足速く日本に帰国し旅をしながら夢見町を目指していた。そしてその旅の途中、ある町に訪れた際ある少年と出会う。この出会いが映司の新たな戦いと旅が幕を上げる。

誘いと帰国と落とし穴（前書き）

初投稿になりますFOXと言います。

初めてなので温かい目で見ていただくと幸いです。

話はオーズ最終回の後からですが、この物語は、仮面ライダー×仮面ライダー フォーゼ&オーズ MOVIE大戦MEGA MAXの話が無視しています。ご了承ください。

誘いと帰国と落とし穴

かつてある戦いがあった。

その戦いは世界の終焉を望む一人の科学者、真木清人が起こしたものであった。

しかしそれを阻止した青年がいた。

青年の名は火野映司。

火野映司はこの戦いの中で相棒であり、欲望の怪人グリードであるアंकを失った。

しかしアंकは最後、満足していた。満たされることが無い自分が死ぬとこまでこれたということに。

この戦いの後、火野映司は止まっていた旅を再開した。その手には2つに割れたタカのコアメダルがあった。映司は再び相棒であるアंकに会えることを信じ、今日も明日のパンツを持って旅を続けいく……。

- - - - -

3月中旬、日本、紀乃川市。現在、火野映司はこの町にいた。本来ならまだ海外にいたはずだが、とある理由により日本に戻ってきていた。

その理由は今から約数日前までさかのぼる……。

・
・
・
・

「お花見ですか？」

『そうよ！映司君、たまにはみんなでパーツとやりましょうよ！』

映司は画面中にいる女性に花見に行かないか？という誘いを受けていた。

この女性の名前は白石知世子。多国籍料理店クスクシエの店長であり、以前映司が日本にいたときにお世話になっていた。現在も日本に帰った時はお世話になっている。

ちなみに画面の中いる理由は、これがテレビ電話だからである。映司はこのテレビ電話を定期的に利用し連絡を取り合っている。

「いいですよ。やりましょうよお花見。」

『じゃあ決まりね！日時は後でメールで送るから！』

「わかりました。ちなみに参加者は？」

『参加者は、私に後藤さんに伊達さん。あと里中さんと鴻上会長も。あ！あとちゃんと比奈ちゃんと信吾さんも来るわよ！』

「そうですか。わかりました。じゃあまたお花見の時に。」

『待つてるわよ〜。』

・
・
・
・
というやりとりがあったのだ。

ちなみに映司はメールで送られてきた日時より早く帰ってきていた。

本来なら花見の日の前日でも良かったのだが、映司はあえて10日以上早くきて、旅をしながら向かうのもいいだろうと考え今にいたる。

「結構いいとこだよな〜こじ。」

映司は歩きながらこの町の感想を言っていた。

「ん？、あれは・・・中学校かな？」

映司は左手に見えた建物を見てそう言った。

「今の時期だと、ちょうど3学期の終了式あたりかな？」

そんな予想しながら映司は中学校の校門の前まで来た。今時間帯だからか、校庭には誰もいない。その隣にある体育館らしき建物からマイクを使って喋っている人の声が聞こえる。
どうやら映司の予想が当たったようだ。

「本当に終了式やってるんだ・・・ん？」

その時、映司は校舎の屋上を歩く少年を目撃した。屋上といっても2階ほどの高さの場所である。その少年は馴れているのか、足どりは軽い。外見は遠くからではわかりにくい、金髪であることはわかった。

「馴れているんだろうな。足どりが軽いし。」

映司はしばらくその少年を見ていたが、ふと視界にあるものが映った。

「あれ・・・犬だ。なんであんな所に？あの子をまつてるのかな？あれ・・・剣をくわえてる!？」

普通、剣をくわえた犬などいるだろうか？映司は考えていると、遂に少年が屋上の縁に来た。

「・・・嫌な予感がする。」

映司はそう言うと、校門を乗り越え、剣をくわえている犬に近づく。

慎重に近づき、犬まであと数十メートルの所になった時、少年が華麗に屋上から飛び降りた。

次の瞬間、犬はくわえていた剣を地面に突き刺した。剣が地面に突き刺さると、ピンク色の魔法陣のようなものが現れ、その中心に穴が現れた。

「危ない！」

映司は身を隠していた花壇から飛び出した。穴の位置は少年が飛び

降りた時、ちょうど着地する場所にできていた。そのため少年は吸いこまれるようにして穴に向かって落ちていった。

「間に合えー！ー！」

映司は穴のある場所に向かって飛び込み穴の中に手を伸ばした。そして……

・
・
・
・
・
「なんとか……間に合った……。」

映司の手はしっかりと少年の手を掴んでいた。

「君、大丈夫！？今引き上げるから！」

「あ……ありがとうございます！」

少年は穴ができた事に驚いていたが、さらに映司に助けられたことにも驚いていたようだ。

映司は少年を引き上げようとする。が……

ドス！

「へえ？」

何かがぶつかってきた。

そして……。

「「!?、うぁー！ー！」」

映司と少年は一緒に穴に落ちていった。映司はその時、自分達が落ちた後穴が閉じる瞬間先ほどの剣をくわえた犬が飛び込んできたのを見た。

おそらく先ほどの音はあの犬が自分の背中に突進した音だったのだらうと映司は思った。

そのまま2人と1匹は穴の中に消えていった。

決断と空間と3つの光（前書き）

第2話です。

書くの難しい・・・。

決断と空間と3つの光

ここは、異世界フロニヤルドにあるビスコッティ共和国。

フロニヤルドには、地球の人々とは違い動物の耳や尻尾を持った人々が生活している。

このビスコッティ共和国には犬耳や犬の尻尾を持つ人々が暮らしている。

そのビスコッティ共和国の中にあるフィリアンノ領。その中にフィリアンノ城は存在する。

現在は夜。このフィリアンノ城の一室である会議が行われていた。

その部屋には重苦しい空気が流れている。

「やはりガレット獅子団は、ミオン砦に攻めて来るようですね。」

1人の男性が発言した。

すると今度は緑色の髪を持つ少女が発言する。

「ガレットは本気でこの城まで侵攻してくるのでしょうか？」

「ガレット獅子団のレオンミシエル閣下は勇猛な方じゃが、かような無茶をされる方じったかのう。」

「理由はどうあれ、この最近の戦はひたすら負け戦じゃ。」

「せめて、ダルキアン卿やテンコ様が居てくれたらう……。」

3人の老人は口々に言う。

この老人達が言っているように、現在ビスコッティ共和国は隣国であるガレット獅子団と戦をしているのだが、こここのところ敗北が続き後が無くなっているのだ。

「騎士ブリオツシユやユキカゼにも使命がありますれば。」

「ともあれ、この戦をしくじれば最悪、このフィリアンノ城まで……。」

「させません！」

老人の1人が不安げに言うと、緑色の髪の少女が叫びながら立った。

「姫様の為にも！ビスコッティの民の為にも！この戦我々が！」

「エクレ、今はその姫様の御前でありますよ。」

「あ……失礼しました。」

栗色の髪の少女が緑色の髪の少女を静めた。そして緑色の髪の少女は席につく。

すると……。

「ありがとう、みんな。我がビスコッティの苦しい戦況、よく分かりました。今度は本当に負けることはできない戦いです。ですから・
・最後の切り札を使おうと思います。」

ピンク色の髪の少女の発言にその場にいた者全員がざわめく。

「ビスコッティ共和国代表、ミルフィオーレ・フィリアンノ・ビスコッティの名において、我が国に勇者を召還します！」

ピンク色の髪の少女、ミルフィオーレは力強く発言した。

しかしこの時、彼女は気づいていなかった。この勇者召還をしたが為に、何の関係の無い人を巻き込んでしまうことに……。

- - - - -

場所は変わって、日本、紀乃川市にあるとある学校。

現在この学校は終了式の真っ最中である。

1人の教師が体育館に向かっていている途中、ある生徒とすれ違つ。

「ん？、おいイズミ、どうした？」

教師がそう言うと、イズミと言われた生徒が振り返る。

「ちょっと飛行機があるので！」

「そうか。気おつけていけよ。」

「はい！」

そしてイズミと言われた生徒は教室に戻っていった。

彼の名はシンク・イズミ。

この学校に在学するアスレチックスが大好きな少年である。

教室に戻ってきたシンクは、帰り支度を済ませ教室の窓を開けた。開いた窓からは良い風邪が入ってくる。

そのままシンクは窓の外に出た。屋根の縁を歩き、教師用の玄関の屋上まで歩いて行く。

ちなみにシンクが何故速く帰るのかは、彼の実家にある。彼の実家はイギリスのコーンウェールにあるのだ。シンクは春休みを実家で過ごす為、速めに自宅に帰り、支度をしなければならいのだ。

そうこうしているうちに屋上の縁に来る。

「よつとー！」

シンクは華麗に飛び上がった。そのまま綺麗に着地と思われた。が・

「てえ？、えー！ー！ー！」

シンクは驚愕した。

何故なら、自分の着地する場所に穴が開いていたのだから。

「うぁー！ー！ー！」

シンクはそのまま穴に向かって落ちていく。落ちる・・・そう思った時だった。

パシ！

何かがシンクの手を掴んだ。

シンクは下を見た。下には何とも言えない空間が広がっている。そして、上を見た。そこには・・・自分の手を掴んでいる・・・青年がいた。

「君、大丈夫！？今引き上げるから！」

青年はそう言った。

「あ・・・ありがとうございます！」

（助かった・・・）

シンクは安心した。そして引き上げられ始める。しかし・・・

ドス！

何かが無かにぶつかった音がした。

(何だろう?)

そう思った矢先。なんと青年が落ちてきた。

「!?!?。うぁー!ー!ー!」

シンクは青年と一緒になって叫んだ。

(一体何が起こったんだ!?)

シンクは思った。しかしそれはすぐ解消された。

穴が閉じる瞬間、犬が1匹飛び込んで来たのだ。

(まさか・・・あの犬が!?)

おそらく、自分を引き上げようとした青年を押し込んだのだろう。そしてさっきの音は犬が青年を押し込んだ音だったのだろう。

そのまま、シンクと青年と犬は不思議な空間の中に消えていった。

- - - - -

あれからどれくらい時間が過ぎただろう……。映司はぼんやりと考える。

あの穴に落ちてからというものの、映司はずっとこの不思議な空間をさまよっていた。

助けようとした少年と剣をくわえた犬は落ちている途中にはぐれてしまい、どこにいるか分からない。

「はぁ……。これからどうしよう……。。」

映司はポツリと呟いた。

とりあえず辺りを見渡してみる。

しかし、何も無い。本当に何も無い。

「困ったな……。。」

映司はどつすればここから脱出できるか考え始めた。

・
・
・
・
・
・

「駄目だ……。何も浮かばない。」

映司はため息をついてしまう。

「こんな時にアングが居てくれたら……。」

映司はポケットから割れたタカのコアメダルを取り出す。
アングならこんな時どうするか。考えてみたが……。

「はぁ……。」

しかし、出るのはため息だけだった。

その時。

「ん？何だろ……この感じ？」

映司は何かを感じ取った。

「懐かしい……。」

懐かしい……。とても懐かしい感じがした。

映司はその懐かしさを探し始める。辺りを見渡す。

「……あれは？」

映司の先には……赤く光る3つの物体があった。映司はそれに手を伸ばす。

「あと……もうちょっと……。」

映司は必死に手を伸ばした。

そして、遂にその3つの光を掴んだ。

次の瞬間、映司は真っ赤な光に包まれる。

そしてそのまま、映司を包んだ光はどこかに飛び去っていった。

連絡とアンテナと降ってきたパンツ(前書き)

第3話です。

今回はビスコッティ側の話です。
映司が登場するのは次回あたりになります。

連絡とアンテナと降ってきたパンツ

現在ビスコッティ共和国は、歓喜の渦に包まれていた。

何故か？、それは隣国であるガレット獅子団との戦に勝利したからである。

ビスコッティはここ最近、ガレットとの戦で負け続け、後が無くなるという事態になった。

この現状を重く見たビスコッティ共和国代表領主、ミルフィオーレ・フィリアンノ・ビスコッティはこの現状を打開すべく、最後の切り札である勇者召還を使用したのだ。

そうしてビスコッティに呼ばれた勇者、名はシンク・イズミ。

勇者シンクの活躍は目覚ましく、一般兵を倒しまくりポイントを量産。更にはビスコッティ騎士団親衛隊隊長、エクレール・マルティノッジとの連携によりガレットの代表領主、レオンミシエル閣下を撃破するなどの活躍ぶりであった。

しかしある事態が起こった。

勇者シンクとミルフィオーレは、なんと勇者召還した勇者は帰還することが出来ないことを知らなかったのである。

その事実にはショックを受けるシンク。

この事態に責任を感じたビスコッティ王立学術研究院主席、リコッタ・エルマールは学術研究院生と共に勇者を帰還させる方法の調査始めるのであった。しかし結局見つからず。

そしてシンクは、その問題はひとまず置いて別の用件をリコッタに頼のだった。

ここはフィリアンノ城から少し離れた浮島の1つ。

この浮島に3つの人影があった。

ビスコッティ騎士団親衛隊隊長のエクレール・マルティノッジ。

ビスコッティ王立学術研究院主席のリコッタ・エルマール。

そしてビスコッティが召還した勇者、シンク・イズミ。
の3人である

彼らは現在、浮島にある召還台にいた。

「くう……。うあ！」

「だから言ったろ。帰れないって。」

シンクはピンク色の魔法陣に手を突っ込み何とか帰ろうとしたのだが、手は弾かれてしまう。

エクレールは短剣をかざしながらそれをため息混じりに見ていた。

「うう……やっぱり駄目なのか……。」

「だから何度も言っているだろう。」

シンクは心が折れそうになる。

すると……。

「勇者様ー、準備できました！」

後ろからリコッタの元気な声が聞こえ、シンクとエクレールはリコッタがいる周波増幅器のところへ。

シンクは帰れないならせめて連絡をさせてくれといい、召還台で携帯を使えばつながるのでは？と考え今にいたる。

そして電波を出すために使われるのが、この周波増幅器である。

ちなみにこの周波増幅器はリコッタが5才の時に発明したらしく、今ではフロニヤルド全域で使われているらしい。

「それじゃお願い。」

「了解であります！」

シンクの合図でリコッタは周波増幅器のスイッチをいれる。

シンクは携帯を開きアンテナが立つか見る。

「・・・あ！立った！」

その声のリコッタが近寄ってくる。

「何がでありますか？」

「ほら、携帯のアンテナ！」

シンクは携帯の画面に表示されているアンテナを見せる。

「よし！じゃ早速・・・。」

シンクはアンテナが復活した携帯を使い、地球にいるレベッカや家族・親戚に連絡をとり始めたのだった。

シンクが家族や親戚と連絡をとりあっている時、エクレールは今回の戦いを思い返していた。

（今回は勇者のおかげで勝つことができた。しかしあれは・・・止めよう。考えただけで恥ずかしい。）

エクレールは今回の戦いで物凄く恥ずかしい思いをしていた。

ちなみに、エクレールが恥ずかしい思いをしてしまったのはシンク

のせいである。

(・・・この後に、もし再びガレットと戦があったら・・・我々はまた勝てるだろうか・・・。)

エクレールがそんな事を考えていると・・・。

「ん？、なんだ・・・あれは？」

空をひらひらと舞っている変な物を見つけた。

今エクレールは暇なので、その空を舞っている物を目で追う。

そして・・・悲劇は起こった。

ポフ。

エクレールの顔になにかが被さった。

「!?!。な、なんだ一体!?!」

急いで顔に被さったもの取る。

被さってきたものにエクレールは戦慄した。

それは・・・

「お、男のパンツだと!?!しかも蝶柄!?!何故こんな物が!?!」

エクレールは素っ頓狂な声を上げる。しかしすぐに黙り込む。

シンクは電話に集中している為か気づいておらず。リコッタはシンクの携帯に夢中である。

(よ、よかった・・・気づかれていない。・・・しかし、何でこんな物が空から降ってくるんだ?)

エクレールは、パンツが降ってきた空を見上げた。だが何故パンツが落ちてきたのかはさっぱり分からなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2950y/>

仮面ライダーオーズ/OOO feat. DOG DAYS 姫と勇者と赤き不死鳥

2011年11月8日02時10分発行